

天国の祖父へ 届け神楽

「55年前の舞」胸に大舞台

2017年に益田市内で登校児童の見守り活動中に事故死した三原董充さん（当時73）の孫2人が7月30、31の両日、開催中の大阪・関西万博で石見神楽を舞う。董充さんは神楽を愛し、55年前の大阪万博の舞台に立った。祖父の指導で育った2人は思い出と誇りを胸に人気演目「八岐大蛇」に出演。「三原兄弟にしかできない舞を見せる」と誓う。

（堀尾珠里花）



三原董充さん

2人は会社員の三原紫輝さん（27）と、大工の三原新さん（22）。益田市久々茂町

が拠点の石見神楽久々茂保存会に所属する。大阪・関西万博で新さんが須佐之男

命、紫輝さんが8頭いる大蛇のうち最後に須佐之男命に退治される1頭を舞う。

共に演目で最も重要な役どころで、董充さんも55年前に最後の1頭を舞った。

董充さんは益田市久々茂町で、児童の安全確保に努めている最中に飲酒運転の軽トラックにはねられ死亡した。生前は久々茂保存会

など市内12団体で組織し、今回の万博の出演団体となる石見神楽神和会の会長を務め、発展に尽力した。

紫輝さん、新さん、優奈さん（25）の孫3人は幼少期から董充さんに連れられ久々茂保存会の稽古場で遊び、5、7歳から舞の基本を教わった。董充さんの期待は大きく、稽古場での週1回の練習以外にも自宅で鍛えられた。

董充さんの死後は情熱が薄れかけたが、18年2月の董充さんの追悼公演で再び火が付いた。鬼と神が戦う演目「道返し」の舞い手に紫輝さん、新さん、笛に優奈さんが選ばれた。

祖父にささげる舞台。新さんは「これだけは手が抜けない」、紫輝さんも「上達した舞を見せたかった」と振り返る。董充さんと過ごした稽古場で休日も自主練習を重ね、集まった200人を鬼気迫る舞で魅了。思

いは客席に伝わった。

万博の大舞台まであと1カ月に迫った6月下旬。益田市駅前町の益田駅前ビルEAGAで稽古する2人の姿があった。演目の最後は2人の戦いとなる。期待以上の舞を見せようと、厳しい視線を交わした。

多数が見物する本番は神楽の魅力を伝えファンを増やす絶好機。「自分が若い時も益田で神楽が続くように」という新さんの言葉に紫輝さんがうなずく。神楽に懸けた董充さんの血潮が今、2人にもたぎっている。

益田・三原さん兄弟
大阪・関西万博出演へ

須佐之男命を演じる三原新さん（左）と大蛇を演じる三原紫輝さん＝益田市駅前町、益田駅前ビルEAGA

